

恋こひ結むすび

第一章

急いで行動すると、ろくなことにならない。だから時間に余裕を持って行動しなさい。

——それは古籍こきあすかが、昔から母親に言い聞かせられてきた言葉だ。

だが、マイペースでうっかり者なあすかにとつて、母の言葉を実行することはなかなか難しい。女子大への進学を機に地元を離れて二年が経ち、ひとり暮らしに慣れてきたと同時に、気の緩みも出てきたのかもしれない。

時間に余裕を持って行動できなかった結果、あすかは今まさに窮地きゆうちに陥おちっている。

今日は大学の定期試験の初日だった。寝坊してしまい、アパートを飛び出したのは数分前。大学までは自転車でも十分もかからない距離で、今ならなんとか間に合あう。そう思いながら全速力でペダルをこぎ、脇道から大通りに出ようとした際、突然ブレーキがきかなくなってしまった。

そして「あれ？ あれ？」と焦っているうちに、停車していた黒塗りの高級外車にぶつかったのだ。

目の前に停まっている高級外車のバンパーには、くっきりと傷跡がついていた。

「うわ……。やばい……。どうしよう」

幸いなことにあすか自身は無傷で済んだが、車のバンパーの傷は酷い。また、自転車はぶつかった衝撃で前輪がぐにやりと曲がり、もう動かせないほどの有様だ。

「と、とりあえず警察に電話っ！ いや、保険会社に連絡する方が先……？ つああ違う、まずはぶつかった相手に謝らないと！ それから怪我がないか確認して……あとはお母さんたちに知らせなきゃ。……うう、絶対に叱られる。しかもこんな高級な黒塗りの外車に乗ってるなんて、ヤのつく人のイメージしかないんだけど……」

動揺したあすかの思考はまとまらず、傷ついたバンパーに視線が釘づけになってしまふ。

「おい、このくそガキ、聞いてんのか！」

突然怒鳴り声が聞こえて、あすかはやっと顔を上げた。すると屈強な男が怒り心頭という様子で迫ってきて、こちらに手を振り下ろそうとしている。

「わあ!？」

「何度声かけても無視しやがって……！ まさかこの車にどなたが乗ってるのかわかっていて、ぶつかったんじゃないやねえだろうな！」

その言葉で、あすかは状況を理解した。故意ではないものの、自分は謝罪もせず男を無視したかたちになったのだと。車の運転席のドアが開けっ放しだから、この男はきっと運転手なのだろう。

殴られる——あすかは咄嗟に首をすくめ、目を瞑った。

「やめなさい」

その声で、男は動きを止める。声を発したのは助手席から降りてきた新たな人物だ。びしっとし

たスーツに身を包んだその人は、女性と見まがうほどの美貌の男性だった。

「……っ、佐賀里幹部」

「女性を脅してどうするのです」

「も、申し訳ありませんっ」

佐賀里という人物に注意されただけで、威勢のよかった男の態度が豹変する。

あすかは、佐賀里の顔をまじまじと見つめてしまった。こんなに美しい男を、あすかは今まで見たことがない。まさに花顔玉容だ。いつまでも眺めていたくなるほど美しい。しかし瞳は鋭くどこか冷たい印象で、近寄りがたい雰囲気醸し出している。

「お怪我はありませんか」

佐賀里はあすかの方を向くと、声をかけてきた。

彼に見とれていたせいで、あすかは反応が遅れてしまふ。

「へ……？ あ、な、ないです！ あのっ、そちらの方は、お怪我は？」

「それはよかった。こちらも怪我はありません。……あなた、学生の方ですか」

「そうです。……って、あつ、あの、急に飛び出してすみませんでした！」

自分の失態に気づき、あすかは勢いよく頭を下げた。やっと謝罪を口にできて、ほっと吐息を漏らす。

「おや」

佐賀里はわずかに目を見開き、そう呟く。あすかは続いて運転手に向き直り、頭を下げた。

「あの、先ほどはすみませんでした。事故に驚くあまり、無視するみたいになってしまつて……本当にすみませんでした」

いくら茫然自失ぼうぜんじしつしていたとしても、謝罪もせずに相手を無視するなんて、どれほど礼儀に欠けていたか。冷静さを取り戻した今なら理解できる。

あすかの謝罪を受け、運転手の男は怒りをおさめた。

「お、おう。ま、まあ、わかればいいんだよ」

「はい。すみませんでした」

「……話を続けても？ 状況を整理しましょう」

再び佐賀里に声をかけられ、あすかは「あ、はい。お願いします」と頷く。

まずは互いに身分を証明できるものを示すということで、相手は名刺を差し出し、あすかは学生証を提示した。すると佐賀里はスマホで学生証の写真を撮る。

「自転車はずいぶん酷いことになっていますが、本当にお怪我はありませんか？」

「はい、なんともないです。あの、そちらも本当に大丈夫ですか」

「私と運転手、それにもうひとり同乗者がいますが、怪我をした者はおりません。ちょうど車に乗り込んだところで、発進していなかったのが救いでした」

「も、もうひとり乗つてらっしゃるんですか」

あすかは車の後部座席へ視線を向ける。しかし窓はスモークガラスで人の姿を確認できない。

「はい。上司——うちの社長が」

「社長……つて、社長さん、ですかっ？」

「ええ」

あすかの顔から血の気が引いた。社長ということはヤのつく職業の人ではなさそうだが、きっと多忙だろう。対応を急がねばならない。

「……警察、呼びます」

あすかはスマホを取り出そうとするが、佐賀里がそれを制止する。

「いいえ。その必要はありません」

「え、でも……」

事故が起きたとき、怪我がなくとも警察へ連絡する義務がある。損害賠償額ばいしょうがくが関係する過失割合を決めるためにも、警察が作成する実況見分調書じじょうけんぶんちょうしょが必要だからだ。

しかし佐賀里は淡々と述べた。

「先ほどご自分でもおっしゃったでしょう？ 飛び出してきたのはあなたですよ。ほら、車に傷がついています。弁償していただかなくてははいけませんね」

「だから、あの、警察を呼ばないと……」

「ええ、その必要はありませんね」

「へ？ いや、け、警察……」

何故か話が噛み合わない。あすかは不安に襲われた。

警察を呼ぶべき状況なのに、佐賀里はそれに応じようとしない。そんなやり取りが続いたのだから

ら、マイペースで鈍いと言われることのあるあすかでも不審に思った。

警察を呼ばれるとなにかまずい事情でもあるのか、と。

(……どうしよう……)

内心で頭を抱えながら思索する。

(どうすれば——っ！)

そのとき、ふと自分の手首に巻かれた腕時計が目に入り、あすかはハッとした。

「——ああっ！ 時間が……っ」

「時間？」

「きよ、今日、大学の試験なんです！ それで急いでいたら、突然自転車のブレーキがきかなくなつて、飛び出しちゃつて……。ああ！ やばい、遅れる！」

(このままじゃ試験に間に合わない……！ でも、事故現場から離れちゃまずいよね!? 本当にどうしよう……っ)

こうやつて考えている間も時間が過ぎていくばかりだ。

おたおたと慌て出したあすかをよそに、佐賀里はおもむろに車の後部座席へ近づく。するとスモークガラスがわずかに下がり、車中の人物と佐賀里が短くやり取りをした。そして彼はあすかに向き直る。

「失礼」

「……っ。あの、すみませ——」

「先ほど渡した名刺、出していただけますか」

いきなりの話題転換にあすかはしばし目を瞠みはつたが、言われたとおり名刺を取り出す。

「……これ、ですよね」

「ええ、それです。このあと試験なのですよね？ では試験が終わりましたら、そこに書いてある住所のビルにいらしてください。受付で私の名刺を出せば済むよう、話を通しておきます」

「え……それはどういう……」

あすかは理解が追いつかず、まごつく。

「ところで時間は平気ですか」

「あっ！」

佐賀里の一言ではっと我に返り、あすかは手渡された名刺と佐賀里の顔を何度も見比べる。彼はすでに話を終えたつもりらしく、それ以上はなにも言わなかった。

このままでは本当に試験に遅れてしまう。しかし接触事故の相手との話し合いが終わっていないのに、この場を離れても平気なものなのか。

あすかはしばらく逡巡しんしゆんしたが、天秤てんびんは目先のことに傾いた。

「……っ、すみません。絶対に、試験が終わったらそちらへうかがいます！」

勢いよく頭を下げ、急いで壊れた自転車を押し始める。

あすかは去り際に振り返って、もう一度叫んだ。

「絶対に！ 試験が終わったら、謝罪と話し合いに行きますから——」

それだけ言うと全速力で大学への道筋を辿った。

そして、定刻のぎりぎりまで試験会場に滑り込み、あすかは試験を受けることができた。しかし事故後で平静ではなかったからか、出来は散々だった。単位取得に必要な点数を取れたかどうか、微妙なくらいだ。

試験が終わわり事故後の対応を思い返すと、血の気が引いた。その場で警察に連絡しなかったばかりか、証拠として接触箇所を写真に残すことを忘れていた。これでは、今朝の事故でついた傷がどれなのか明確にできない。なんと問抜けなのだろう。

もしも朝まで時間を戻せたら、絶対に警察を呼んだのに。

考えてみれば、病欠で試験を受けられない学生のための再試験が、来週行われるはずだ。事故があったことを証明できれば、今日の試験に間に合わなかったとしても、あすかも再試験を受けられたかもしれない。

けれど後悔しても後の祭り。あすかは渡された名刺に記載された住所へバスで赴いた。

「ここ……だよねえ」

七月の太陽に照らされながら、悠然とそびえ立つビルを見上げる。周りはオフィス街で、自分のような学生はほとんど見かけない。スーツに身を包んだ大人ばかりで居心地が悪い。

しかしこのまま逃げるなんてできない。事故を起こして責任も取らずに逃げるなど、許されぬ行為だ。

「女は度胸、女は度胸だ……！」

妙に男らしい台詞を唱え、額に滲む汗を拭ってから、あすかは近代的なビルに足を踏み入れる。

清潔感のあるエントランスに圧倒されつつ、とりあえず受付に向かった。

受付嬢に今朝もらった名刺を見せると、彼女は「少々お待ちください」と電話で連絡を入れる。

そして一言二言話をすると、電話を置いてあすかに笑みを向けた。

「そちらのエレベーターで最上階まで行ってください」

「あ、はい。わかりました」

(最上階……)

緊張を隠せないまま、言われたとおりエレベーターで最上階に向かう。その最中、もらった名刺を何度も見直した。そこには『社長秘書』と印刷されている。

(このビル全部、この会社のものってことはないよね。そんな大物の車を傷つけちゃったとしたら、とんでもない弁償額を提示されるかも……。うう、駄目だ、怖くなってきた)

嫌な想像を膨らませているうちに、エレベーターは最上階に到着して、扉が開く。おそるおそる降りると、今朝会った美貌の男——佐賀里がいた。

「お待ちしていました」

「あ、の……こんにちは」

あすかはぺこりと頭を下げる。そのとき、「まさか本当に来るとは」という小さな声が聞こえた。

(……あたし、信用されてなかったんだなあ)

あすかの顔に自嘲気味な苦笑が滲む。

顔を上げると、佐賀里は廊下の奥にある扉を示した。

「どうぞこちらへ、古籍あすかさん」

「あ。はい」

ぼつちり名前まで覚えられている。学生証を見せたので当然といえば当然なのだが、名乗る前に呼ばれると背中がひやりとする。

「あ、改めまして、古籍といいます。今朝は本当にすみませんでした」

「いいえ。謝罪は中でお待ちの社長にお願いします」

「あ、社長さんに……」

重い扉を開けて、さらに奥にある部屋へ促された。

ぶつかった車に乗っていた最高責任者が社長なのだから、その人物と話をしなくてはならない。わかっていたのに、いざ対面するとなると、とてつもなく緊張する。なにせ今まで、社長なんて立場の人に会ったことすらないのだ。

粗相をしないか心配で堪らない。どくどくと鼓動が大きく響き、まるで耳元で心臓が鳴っているみたいだ。

そんなあすかをよそに、佐賀里は二枚目の扉をノックして声をかける。

「社長、いらっしゃいました」

彼は返事を待たずに扉を開けた。その部屋の中央には重厚なテーブルと革張りのソファセット

が置かれている。さらに奥にある格式高い執務机に男が座り、電話をしていた。

しかしこちらに気づくと、躊躇なく受話器を置く。相手の都合などお構いなしの行動だ。

(……すご。いいのかな)

あすかは目が点になる。執務机に座る社長と思しき人物は、顔を上げてこちらを見た。

「よう。来たな」

「あ、あの、今朝は本当にすみませんでした」

あすかは気づけば、男の視線を避けるように頭を下げていた。

(……やっちゃったー……!)

正直に言えば怖気づいたのだ。事故を起こしてしまった非があるあすかは、相手の視線に耐えられる自信がなくて、怯えてしまった。

車を傷つけた上に、相手の視線を避けるなんて失礼な態度をとっては、きっと男は怒るだろう。

怒鳴られるかもしれない。ぎゅつと唇を噛んだ。

「ああ、いい。顔を上げる」

——しかし予想と反してどうしたことか。相手の声に怒りは含まれておらず、むしろ機嫌がよさそうだ。

(……あ、あれ。怒って、ない、……? もしかして聞き間違い、とか)

いや、そんな都合のよい間違いがあるはずもない。あすかは不安を覚えながらも、そろそろ顔を上げる。

そして、社長らしき人物の顔を目にした瞬間――

(……は?)

それまで胸中で渦巻いていた不安や迷いなど、完全に消え去った。思わず、ぼかんと口を開けてしまう。

三十歳そこそこの社長と思しき男は、色味の濃いスーツを身にまとっている。座っていてもわかるほど長身だ。一見軽そうに見えるものの、自信に満ち満ちた精悍な顔つきと少し垂れた目尻が印象的な美丈夫である。あまり異性に興味を持たないあすかさえ、惚れ惚れするほどの容貌だ。

「どうした」

男は怪訝そうに問いかけてくる。しかしそれに答えず、あすかは叫んだ。

「……若っ!」

端正な男が眉間にしわを寄せる。

「……なに?」

「社長さん、若い! え、本当に社長さん!? うわあ、しかもめちゃくちゃ格好いい! 全然想像してたのと違った! 社長さんっていうから、てっきりもっとおじさんなのかと……っ」

そこまで言ったところで、あすかははっと自分の失言に気づく。慌てて口を押さえたがもう遅い。ちらりと視線を向けると、社長と佐賀里は予想外のことを言われた、という顔をしている。やってしまった。ありえない大失態を犯してしまった。

(ひいつ、しまったああああ!)

あすかはうな垂れ、目を閉じた。うっかりにもほどがある。

(なんてことを……っ。やばいやばいやっちゃった、やってしまったよ! あたしのあほっ!)

「……すすす、すみませんごめんなさいっ」

まるで子どものように身体を小さくして謝った。謝って許される失言じゃないことはわかっているけれど、謝ることしかできない。じわりと涙が浮かんでくる。

(絶対怒られる……!)

ところが、社長の反応はまたも予想外のものだった。

「俺は想像していたよりも若いか」

「……へ?」

顔を上げると、彼は楽しそうに口元に笑みを浮かべていた。

あすかは呆気にとられ、内心で首をひねる。こういう場合は怒鳴り散らされるものではないのか。そのために呼び出されたのではないのか。

理解の追いつかないあすかに、社長が唐突に言う。

「それより腹が減ったな」

「……っ、はい?」

「昼はまだだろ? 付き合え」

(は、え、い、いきなりっ? 昼って、お昼ご飯? 今? 今から? え、ええっ?)

男は椅子から立ち上がり、まだ頭が混乱しているあすかに近づいた。

「名前は」

「古籍あすかさんです」

そばに控えていた佐賀里がすかさず答える。

「あすかか。よし、あすか。おまえはなにが食いたい？」

「え、あ、う、つと、お、お寿司っ」

思わず素直に好きなものを答えてしまう。しかし答えた直後、こんな状況で馬鹿正直に返事をする者などいないと気づく。

社長もそう思ったのか、くつと喉を鳴らして笑う。そしてあすかの肩に腕を回した。

「行きつけの店に連れて行ってやる」

「……っ」

(肩！ ぎゃあっ)

あすかは心の中にかわいくない悲鳴をあげたが、幸いにも唇から漏れ出ることにはなかった。

(え、ほ、本気？ 本気で言ってるの？ これ)

社長は決定事項だとばかりに歩き出す。それを、秘書の立場にある佐賀里が引き留めた。

「社長。このあと会食の予定が入っていることをお忘れですか」

「断つとけ。俺はあすかと飯を食う」

「……っ」

(なんでもいいから、肩を抱く手を外してーっ)

反論しようにも声が出てこない。あすかは事態についていけず固まるのみだ。

そんなあすかをよそに、佐賀里は上司に向かってため息をついた。

「まったく……勝手な都合で予定をキャンセルなさるのは、社長としていかがなものかと思えます」

「おまえこそ俺の目を盗んでは楽しんでるだろうが」

「人聞きの悪い。私は自分の仕事に責任を持っていますよ。仕事を放って会ったばかりの女性を強引に食事に連れ出したりはしません」

「思っていた以上に面白いからな。もっと知りたくなった」

(……？ なんの話してるんだろ?)

すぐそばで会話が飛び交っているのに、さっぱりついていけない。

「どうせ、役に立たないくだらねえ話を延々とするような相手だ。俺じゃなくてもいいだろ。佐賀里、代わりにおまえが会食に行けよ」

「お断りします。そうですね、私も先方の無駄話にはほとんど呆れていましたから」

綺麗な顔をして辛辣な言葉を吐く佐賀里に、あすかはびっくりした。しかしこれが彼の本来の姿なのだろう。社長はまったく驚いていない。

「キャンセルします」

「ああ、任せた」

そして結局、会食はキャンセルされる運びとなった。

呆然としていたあすかは、再び歩き出した社長に肩を抱かれたまま、部屋から連れ出される。そ

れから彼は、会社の裏に停まっていた車に乗り込むまで一言も発しなかった。そんな彼に気圧されつつ、あすかは車に押し込まれたのだった。

人間とは実にゲンキンな生き物だと思う。

車が向かった先は、社長がひいきにしているという寿司屋だった。カウンターに座って、頼んだ寿司を職人が目の前で握ってくれる店だ。回転寿司屋でしか寿司を食べたことがない庶民のあすかは恐縮しきりで、借りてきた猫のように寿司が握られる様子をただ眺めていた。

ところが、トロの炙りを目にした途端、テンションが上がってしまった。そういえば、今朝は寝坊して朝食を食べられず、実はかなり空腹だったのだ。

「すごい！ すごい、美味しそう！」

自分が何故社長に会いに来たのか、あすかの頭からは抜け落ちていた。隣に座る社長に対して当初抱いた緊張など、今はすっかり忘れている。

気づけばあすかは、ひとつずつ握ってもらう寿司を、次から次へと頬張っていた。

「……美味しいっ！ こんなに美味しいウニを食べたの、初めてです！」

「ありがとうございます」

思わず素直に職人に感想を伝えると、相手の表情はやわらかく緩んだ。隣で寿司を食べている社長もどことなく機嫌がよさそうである。

「美味いか」

「んっ、すごく美味しいです。社長さんっていつもこんなに美味しいお寿司食べてるんですか？」

「社長はやめる。長門だ。長門隆二」

なにを言われているのかわからず、あすかは首を傾げる。彼は社長なのだから、呼び方として間違っていないはずだ。

すると社長——長門は、言い聞かせるように言葉を続けた。

「あすかは俺の部下じゃないだろ？ 俺もおまえのことは名前で呼んでる。それなら、おまえも同じように名前で呼ぶのが妥当だろ」

長門としては筋の通った話らしいが、どう見ても自分より十歳ほど年上の相手を名前で呼ぶなど無茶な要求だ。ついでに、初対面である自分に対して『あすか』と抵抗なく下の名を呼ぶのもおかしい。

「えっと……」

無理だ。さすがに呼べない。

「ほら、呼んでみる」

「……あの」

「ほら。どうした」

何度も催促される。当然躊躇したが、どうやら呼ばないという選択肢は与えてくれないようだ。あすかは仕方なく言ってみた。

「長門さん……で、いい、ですか？」

「な、ま、え、だ」

「う〜……」

どうしても曲げそうもない意思を感じ、あすかは困り果て両眉を下げる。

すると、あすかの目の前に出された甘エビが一貫、長門の指に攫さらわれていく。

「ああーっ！」

「ちゃんと呼べたら食わせてやる」

「ずるい！ 横暴！」

相手が年上であることも社長だということもすっかり忘れ、感情のまま叫んでいた。

「言ってみろ。早く言わなきゃ俺がもらうぞ」

「だ、駄目！ ……です！」

ふふん、と意地悪く笑われる。どうやらこれは従う他ないらしい。あすかは渋々しぶとく、長門の望みど

おりにした。

「リユー……ジさん、でいいんですよっ」

「よくできたな。ご褒美だ」

長門はにやりと口元に笑みを浮かべ、あすかの前に甘エビを戻す。あすかは戻ってきた甘エビを

見て、もやもやした気持ちなど吹き飛んだ。

「いただきます！ うーん、ふりふり〜」

やっと味わうことのできた甘エビに、にっこり頬が緩む。美味おいしい。これは待たされたかいが

あつたものだ。

「ついでに敬語もなしだ。……といっても、すでに俺にため口を利いてるから、関係ねえか」

そこでふと気づく。言われてみれば、甘エビ欲しさについて『ずるい』だの『横暴』だの

と喋しゃべってしまっていた。

「んぐ。あう、すみませ……」

「敬語なし、な」

「う……」

「なし、だ」

「……はい。じゃなくて、わかった」

「おう」

(ほ、本当にいいのかな)

本人がそうと望むなら、気にするだけ無駄かもしれない。

納得いかない気持ちを切り替えるために、熱いお茶を一口飲む。

(……まあ、本人がいろいろ言ってるならいいよね、うん)

そう自分に言い聞かせ、あすかは長門に顔を向けた。

「ところで社長さ……じゃなかった、リユージさん」

早速言い間違えたとじろりと睨にらまれて、すぐに言い直す。

「遅くなったけど、事故のこと、保険会社と警察に連絡しようと思ってて」

そもそもこの話をするためにあすかは彼に会いに来たのだ。

「高校のときに自転車事故の保険に入ったんだよ、確か。大学入ってからその保険を続けているはず」

両親に手続きをしてもらったから記憶は曖昧だが、問い合わせればわかるだろう。

「警察には連絡し損ねちゃったけど、あたしが飛び出したのも、そっちの車に傷つけたのも事実だから、ちゃんと弁償します」

「ああ、そのことなら気にするな」

さらっと言われて、あすかは首を傾げた。

「どういうこと？」

「あすかに弁償してもらうつもりはねえってことだよ」

「いやそれはさすがに……。あの佐賀里さんって人も、弁償してもらわなきゃって言ってたし」
過失があれば弁償責任は発生する。なんの責任も果たさないといいわけにはいかない。

しかし長門は首を横に振る。

「あいつの言うことは真に受けるな。といっても、おまえ以外なら弁償させるがな」

ますます意味がわからない。

「そんなわけにはいかないよ。このままじゃなにも償えない」

「謝罪しただろ」

「それは当然というか、ただ謝っただけで……」

「そもそも、弁償させるつもりなら飯に誘わないだろ。さっさと金払わせるなりなんなりしてる」

「いやいやいや。リュージさんの気持ちはわかったけど、やっぱりこのままなにもなしじゃ駄目じゃないかな。事故の過失はこっちにあるわけだし。……正直、難しいことはわからないから、保険会社に任せることになると思うけど」

なにせ事故を起こしたのは初めてなので勝手がわからない。

「変なところで頑固だな。……わかった、示談にする。じゃなきゃあすかは納得しそうもないしな。これでいいか」

「うん」

一番引つかかっていた件がとりあえずまとまった。あすかは、ほうと息を吐く。

「まあ、これでおまえの気がかりが片づくなら構わないが、これ以上あすかと金銭が絡む関係になるつーのは、避けたいところだ」

長門はがりがりと言葉の後ろを掻いた。

「今回俺は、おまえにせがまれて、断った弁償を受けることになった」

「そう、だね」

「あすかの要求に俺は仕方なく、不本意だが、折れたかたちだ」

「う。そうだ、ね」

「あすかの意を叶えたわけだな」

「う、うん」

「つまり俺はなにかしら、褒美をもらってもいいと思わないか」
「褒美？」

唐突すぎる話に何度も瞬きする。

「俺は主張を曲げてまで、あすかの希望を聞いたわけだしな」

「そ、そっか。あれ、そう、なのかな？ ……まあいつか」

（なんか流れが変な方向へいつてるような……）

引っかかりを覚えながらも、長門の言わんとしていることはあすかに伝わっていた。

「じゃあえっと、なにか欲しいものがあるの？」

何気なく尋ねると、彼はまるで悪戯を思いついたような瞳を向けてくる。その目に射すくめられ、

あすかの脳内で警鐘が鳴った。

いったいどんなことを要求されるのやら、と心臓がばくばくとうるさく鳴る。

「そうだな。週に一度……いや、二度だ。俺と一緒に飯を食え」

想像と大きくかけ離れたことを言われ、あすかはきよんとした。

「飯って、今みたいに？ こうやって？」

「ああ、そのとおりだ」

「うーんと……なんで？」

その疑問は当然のものだ。提案の真意が掴めない。

あすかの問いかけに、長門はあっさり答える。

「社長なんて立場についていると、仕事絡みの相手と飯を食う機会が多い。だが、美味くなくてな。考えてみる。相手が自分の顔をうかがっているのを感じながら食う飯を、美味いと思えるか？」
あすかは想像してみた。そしてしかめ面になる。

「思えない……」

「それに比べて、おまえは本当に美味そうに飯を食う。美味そうに食う奴と食事をすれば、俺も気持ちがいい。だから、週に二度、俺の時間が空いたときに一緒に飯を食うぞ。もちろん俺が奢つてるから、金のことは心配するな」

なんとも太っ腹な話である。

あすかとしては唐突すぎる話だが、長門は冗談で言っているわけではなさそうだ。確かに、美味しそうに寿司を食べているあすかを見て、長門も機嫌がよかった。そんな人は聞いたことがないけれど、もしかしたら人に美味しいご飯を食べさせることに楽しみを見出す男なのかもしれない。（変わった人だなあと思うけど……。そういうことなら納得、かな）

どうしようかとあすかは悩む。しかし結局、答えは決まっているも同然だ。

長門の望みと一緒に食事をする。あすかの望みを聞き入れてもらった代わりに提案なのだから、拒否しづらい。

それに、こちらにとって悪い話でもない。実家からの仕送りとバイトでひとり暮らしをやりくりする貧乏学生としては、食事代が一食でも浮くのは助かる。

心配するとなれば、食事以外のいかがわしい意味が込められている可能性だが——それは考えな

くてもよきそうだ。何故なら長門はかなりの美形で、女性に困ってはいないだろう。彼ほどの大人の男性が、あすかのような大学生を相手にするとも思えない。

つまりあすかに求められているのは、いち友人として週に二度ほど一緒に食事をする事。そう捉えて、あすかは口を開いた。

「わかった。あたしたちは、リュージさんの時間が空いてるときに一緒にご飯を食べる友達ってことだよね」

大きく頷きながら言うと、長門は軽く目を瞞った。そして一拍置いてにやりと笑みを浮かべる。

「……そうだとしたら、スマホの番号を教えてくださいるだろ」

「うん、いいよ」

あすかはスマホを取り出し、長門と電話番号を交換した。

登録を終えた彼は、スマホを振りながらさらに要求してくる。

「一日に一回は連絡を入れろよ」

「え、毎日ってこと？ でもリュージさんは社長さんでしょ？ 忙しいのに邪魔しちゃ悪いよ」

「俺がいいと言ってるんだ。この約束を守らなかつたら、美味しい店に連れてってやらねえぞ。どうせ行くなら美味しいところがいいだろ」

「そりゃー……うん」

「正直な奴だな。いいか、約束だ」

長門は喉の奥で笑い、あすかに念押しした。

あすかの心に、長門の迷惑にならないのかとか、少し強引すぎやしないかとか、複雑な心情が渦巻く。しかし、美味しいお店に連れていってもらいたいのも本心だ。

ここはとりあえず頷いておくことにする。

「……うーん、わかった」

その返事に、長門は満足げに笑みを浮かべた。それを見てあすかの気が緩む。

「でもリュージさんみたいな人でよかったな」

「なにがだ」

「事故の相手。だって車がめちゃくちゃ高級車だし黒塗りだったから、もしかしたらヤクザの人の可能性もあるかもって思ってたんだ。勘違いして、ちょっとびくびくしてたよ。あはは」

そう笑い、あすかはアワビを口に入れる。

すると、店内が少し静かになった気がした。長門が返事をしないばかりか、寿司職人が息をのんだように見えたのだ。

アワビをのみ込んだところで、あすかはぱちぱちと瞬きを繰り返した。そして声を潜める。

「えーと……あたし、なんか変なこと言った？」

「いや？」

「本当に……？」

「ああ、本当だとも。それよりも、俺がなにじゃなくてよかったって？」

長門はにやにやと笑みを浮かべて、何故か楽しげに訊いてきた。なんでだろうと不思議に思いつ

つ、あすかは答える。

「ヤクザの人。相手がヤクザの人だったら、なんて言われるのか想像するだけでも怖いよ」

「怖いか」

「そりゃ、怖いってー。まあ会ったこともないから、全部想像なんだけど。……リユージさんは怖くない？」

「――俺か」

「誰だって怖いと思うよねえ？」

そう問いかけると、長門はこらえきれないといった風に噴き出した。そして「ははっ」と声をあげて笑う。

「リユージさん？」

どうして彼が笑っているかわからず、あすかは首を傾げた。それにも構わず、長門はしばらく笑い続ける。ひとしきり笑ったあと、彼は目尻を下げて口元を緩めた。

「想像以上だな、あすか。気に入った」

長門はあすかに手を伸ばし、頬を撫で上げる。得体の知れないぞわりとした感覚が全身に走り、あすかはびくっと身体を揺らした。

「――っ、びっくりした。なに？」

「ん？　なんだと思う？」

「へ？」

長門の瞳の奥が鈍く光る。先ほどまでとまったく違う妖しさのようなものを感じ、あすかは少し怯んだが――

「……いや、こつちの話だ。ほら、次はなにが食いたい？　遠慮せずに言えよ」

長門はすぐに、優しい笑みを浮かべた。そして小首を傾げるあすかに、上機嫌に寿司をすすめる。こうして、住む世界がまるで違う、長門とあすかとの奇妙な友情関係が始まったのだった。

* * *

長門隆二は三十五歳の若さながら、いくつもの会社を経営する企業人である。

だが、それはあくまで表向きの顔。本職は近衛組直系六州会会長という肩書きの、れっきとしたヤクザだ。とにかくやり手で、上部組織である近衛組三代目組長の覚えもめでたい。

金と権力があり、見目も悪くないため、長門には多くの女性が近寄ってくる。その中で好みの相手を選び、一晩だけの関係を楽しむこともしばしば。彼が大好きであることは自他共に認めるところだった。

そんな長門がお気に入りを見つけたのは、七月も終わりのある日。

道端に停めておいた車に乗り込んだ直後、自転車がぶつかってきたのだ。車内から見た事故の相手――あすかの容姿は平凡。これまで相手にしてきた女たちとは違うタイプだが、何故か興味を惹かれた。

それで長門は、あすかが会社まで来るよう部下の佐賀里に誘導させたのだ。あすかと直接会って面白みがなければ、車の修理費として金を搾り取ればいい。そう考えていたのに、出会い頭でのあすかの発言、こちらの想像を裏切る言動に、長門は好奇心を刺激された。いつの間にか、あすかに惹き込まれ——自分のものにしてたくて堪らなくなった。

だからといって、すぐにばかりと食べてしまっってはつまらない。もっとじっくりあすかのことを知り、彼女のすべてを自分のものになりたい。幸いにして、長門がヤクザだとは思っていないようにだし、時間をかけて落としていくのも一興だ。

そんな考えで、あすかが天然でやや世間知らずな大学生なのをいいことに、週に二度食事をする約束を取りつけたのだった。すべては、彼女に会いたいがために。

——一日に一回は連絡を入れろよ。

それは本気の約束だったが、あすかはそれほどの拘束力を感じていなかったらしい。事故の三日後、彼女は連絡を入れられた。

そこで長門から連絡すると、あすかはかなり驚いていた。それ以来は今のところ彼女から電話がある。

長門にとっては、楽しい時間だ。

そしてあの事故から一週間が経った昨日。事故で自転車が駄目になったため、あすかは大学へ徒歩で通学していると聞いた。それならばと、長門は今日、大学まで迎えに行く約束を取りつけた。

あすかから訊き出した終業時間に、大学の正門から少し離れた場所に車を停めて待つ。しばらくして、顔をしかめたあすかが車に近づいてきた。後部座席の窓を開けて長門が顔を見せると、彼女は信じられないと目を丸くする。

「うわ、本当にリュージさんが来た……」

「なんだその顔は」

フォロワーが難しいほどの間抜け面だ。長門は思わず微苦笑を漏らす。

「や……だって本当に迎えに来ると思っただけだよ。リュージさん、忙しそうだし……」

「昨日迎えに行くと言っただろ？ 信用してなかったのか」

「信用っていうか……」

「まあいい。早く乗れ」

言い訳も聞かず、車に乗るよう促す。あすかが後部座席へ乗り込むと、運転手はすぐに車を発進させた。

「あすかに見せたいものがある」

「見せたいもの？」

「ああ。きつと気に入るぞ」

長門がにやにやしながら言うと、あすかはきよんとする。何度か「見せたいものってなに？」と訊かれたが、長門は「まあ待て」とかわした。『あれ』を見て驚くあすかの顔が見たいからだ。

ほどなくしてあすかの住むひとり暮らしのアパートへ到着した。車から降りると佐賀里が立つて

いる。その姿を見て、あすかはますますわけがわからないという顔になった。

長門は片手を上げて佐賀里に声をかける。

「おう。用意できてるか？」

「お疲れさまです。例のものは、こちらに」

佐賀里が身体を少しずらすと、隠れていた物体が現れる。それは真新しい自転車だった。

あすかが口を開くより早く、長門は教えてやる。

「あすかのために選んだものだ」

「え？ あたしのため？」

あすかは瞳がこぼれ落ちそうなほど大きく目を見開いた。——そう、この顔が見たかったのだ。

「もらっていいの？」

「あすかがもらってくれなきゃ処分するだけだ」

「え、もつたいないよ！」

「なら、もらってくれるな？」

半分脅しに近い台詞を突きつける。するとあすかは「うーん」とうなって悩み始めた。

しばらく考え込んでから、長門の顔を見返して再び尋ねてくる。

「……いいの？」

「遠慮するな」

「ありがとうっ」

あすかがとびきりの笑みを浮かべた。長門はそんなあすかの頭をくしゃくしゃと撫でてやる。撫でるのをやめると、あすかは新品の自転車へ近づいた。

その背中を眺めつつ、長門は佐賀里に話しかける。

「自転車、どうしてここにあるんだ。先に駐輪場へ入れとけと言っただろ」

非難を含んだ低い声だったが、佐賀里は軽く肩をすくめただけで怯みもしない。

「こちらのアパートは男性立入禁止となっていて、入れなかったんですよ」

「なに？」

眉をひそめた長門の声に反応したのはあすかである。

「あ、そうだよ。ここ、女性専用アパートなんだ。家族以外の男の人は入れなくて、宅配便の人でも管理人さんが対応することになってるんだよ」

するとあすかは、不思議そうに首を傾げた。

彼女は想像もしていないだろう。長門があわよくば、自転車を与えたついでにあすかの部屋へ上がり込もうと不埒なことを考えていたなんて。

長門はしばし黙り込むと、涼しい顔をしている佐賀里を、恨みを込めて睨む。

「おまえ、知っていただろ」

「ええ。存じていました」

あすかと出会ってから、佐賀里に彼女の身辺調査をさせた。住んでいるアパートが女性専用であ

ることは、とつくに挿んでいたはずだ。それを報告しなかったのはわざとだろう。

「おまえな……その性格、直した方がいいぞ」

「どうせすぐわかることです。それに訊かれなかったので、わざわざお話しすることもないかと判断しました」

あすかに聞こえないように小声で咎めた長門に、佐賀里はしれつと返した。きつと、言わない方が面白い——がっかりする長門の姿を見られる、などと思って言わなかったのだろう。彼はそういう、性悪な一面を持つ男なのだ。

普段は従順に動く優秀な部下なのだが、人の不幸を楽しむところがある。

それはさておき、長門は楽しみがひとつ減ったと落胆する。

いやしかし、あすかの部屋に入ることにごだわる必要はない。自分の部屋に呼ばばいいのだ。

そんなことを思いつき、長門はひとりほくそ笑む。佐賀里が非難めいた視線を送ってくるが、なんのそのである。

「あーすか。そろそろ飯に行くか」

長門が声を弾ませると、あすかは振り返った。

「あ、そうだね。つてあれ、なんかリユージさん機嫌直ってる？」

「ん？ なあに言ってる、いつ機嫌が悪かったって？」

「んん？ あれく気のせいかな」

首を傾げるあすかに「そろそろ自転車を駐輪場へ置いてこい」と言うと、彼女は気になっていた

ことをすっかり忘れたかのようにアパートに入ってしまった。

機嫌が直った長門は、あすかを創作イタリアンの店へ連れていった。

テーブルに並べられた料理は、どれもあすかが初めて目にするものらしい。彼女は目をきらきら輝かせ、喜んで口に運んでは、「美味しい！」「食べたことない味だけど、いけるね」と素直に感想を言う。その裏表のない反応は、長門を満足させた。

食事をしながら会話をしていると、長門の年齢の話になった。素直に答えたら、あすかは驚く。

「え、リユージさんつて、三十五歳なの？ 見えない！ もっと若いと思ってたよ」

「初対面で『若い』と叫ぶくらいだからな」

初対面での醜態を思い出したのか、あすかは恥ずかしそうに目を逸らす。その仕草に、長門は笑みを深める。

「俺にあんな風に言ったのは、あすかが初めてだからな。なかなか忘れられないぞ」

あんなインパクトのある出来事は稀だ。あすかをからかう声には笑いが滲んでいた。

「うーん、親にもいつも言われるんだよねえ……。もうちょっと考えてから喋りなさいって。口を開くと、子どもだつてすぐにはれちゃうんだよねあ……」

子どもと言っているが、あすかはすでに二十歳。もう世間的には大人だ。それでも無理に背伸びせず、本来の性格をそのまま表に出す愚直さは、ある意味あすかの美德といえた。

「あすかはそのままでいいだろ」
「へ？」

「素直なのが、あすかのいいところだつて言ってるんだ」

長門が正直に褒めると、あすかは数度瞬きを繰り返して、照れくさそうに笑って俯く。
「そんなこと言われたの初めてだよ」

ほんのりと色づいた目元が、子どものような素顔と相反して妙に艶を帯びている。

長門は思わず、あすかに向かつて手を伸ばしたが——彼女がぱつと顔を上げたせいで、固まった。そして、行き場をなくした手を引っ込める。

(……なあにやってんだ俺は)

自分らしくない行動に、長門は内心で苦笑を漏らした。

「あ、料理冷めちゃうよね。食べよう」

照れ隠しなのか本心なのか、あすかはまた目の前の料理に意識を移す。長門は今度こそ、口元に苦笑を浮かべた。

長門は、十五歳も下の大学生——それも平凡で大人の女とはほど遠いあすかに執着している。自分で思っていたよりも、その執着は強いようだ。

あすかは長門がヤクザだと知らない。そのせいもあるだろうが、環境も立場も違う彼女との会話は気が楽だった。今まで付き合ってきた、浅ましい欲望をむき出しにする女たちとは違うからかもしれない。

長門はこの時間を純粋に楽しんでいるのだった。

食後のデザートの木苺のジェラートを食べるあすかへ、長門は問いかける。

「バイトは大変だろ」

あすかは駅前の飲食店で、週に三日から四日ほどアルバイトをしていると、以前聞いていた。

「大変じゃないって言ったら嘘になるけど、まあまあ楽しいよ。みんないい人だし。仕送りだけひとり暮らしをやりくりするのはきついもん、仕方ないよ」

ジェラートを堪能しながら、あすかはけろっと答える。

「でももうすぐ試験終わって、夏期休暇に入るからね。休みの間は、もう少しバイトを入れようかなって思ってるんだ」

「それはあまり賛成できないな」

長門はぼそつと呟く。

「え？ 聞こえな……」

「これ以上バイトを入れるなよ。あんまり忙しいとあすかに会えなくなるだろ」

そう言うと、あすかにきょとんと見返された。その様子に少しむっとする。

「おまえは俺に会いたくないのか」

「へ？」

あすかはますます目を大きく開き、首を傾けた。長門がなにを言いたいのかわからないようだ。

頭の上に浮かぶ疑問符が見える気がする。

「どっちだ」

強い口調で重ねて問う長門。あすかはさらに首を傾げつつ、口を開いた。

「会いたくないのかって言われたら、そうじゃないけど……リユージさん、ご飯をご馳走してくれ
るし」

「俺は飯を奢るだけの男か。ずいぶん軽いもんだな」

「え……ああ！ ちが、えっとそんなつもりじゃ……」

そこまで言いかけて、あすかは口を噤んだ。長門には、彼女の心情が容易に察せられる。

(ないと言いつつ切れねえよな、この状況で)

何故なら実際、長門は『ご飯をご馳走する』男なのだ。それは、あすかに会う口実に、食事を共にすることを条件づけたからである。とはいえ、敢えて口にするほど無神経な人間は少ない。

それを口に出してしまったあすかは、自分の失態に気づいて眉尻を下げた。こちらの様子をうかがっている。

しかし長門はにやりと口角を上げた。

「……怒ってないの？」

「馬鹿正直な性格だなあと思ってるぞ」

「う……。確かにそのとおりなんだけど、さ。……気を悪くした、よね？」

あすかが上目遣いで尋ねてくる。その表情を自分に向けられるのは気分がいいが、あまりに無防

備なので、他の人間にも同じことをしているんじゃないかと勘ぐってしまう。

「どうか。まあ、まるで都合のいい男のように扱われるのはごめんだな」

意趣返しの意味もあつて、長門は意地悪な態度をとった。

するとあすかは、慌てて否定してきた。

「そんな風には思っていないよ。リユージさんのことを都合のいい男だなんて思えないって！
だってリユージさん社長さんじゃん！」

都合のいい男だと思えない理由が社長だからというのはさっぱり理解できないが、あすか本人に
はその言い分がおかしいという自覚はなさそうだ。

長門は笑いをこらえながら、重ねて問いかけた。

「じゃあ、俺に会いたいだろ」

「……う、うーん」

「どっちだ。はつきりしろよ」

「う、うーん、うーん」

悩む様子が面白くて、長門は畳みかけるように問う。

「どっちなんだ」

「う、うーん」

「あーすか」

うなりながら考え込んでいたあすかだが、不意に瞳を輝かせた。

「リュージさんこそ、あたしに会いたいの？」

「……なんだって？」

まさに直球だ。

「あたしにばつかり訊くんじゃなくてさ。リュージさんは？ あたしに会いたい？」

あすかの向ける濁りのない瞳に少したじろいだだが、それも一瞬で消した。にやりと人の悪い笑みを浮かべて、長門は答える。

「当然だろ」

「ふうん。会食っていうのはそんなに面倒なんだねえ」

「……おい。なんの話だ」

わけがわからず、長門は怪訝な声を出した。あすかは「あれ？」と首をひねる。

「前に言ってたじゃん。仕事の相手と食事するのは嫌いだって……。自分の顔をうかがいながら食事したら、美味しい食事も不味くなるって」

「ああ。そういえば、そう言ったな」

「忘れちゃった？」

「いや、忘れてねえよ」

あすかを言いくるめるための言葉だったが、本心でもあった。

六州会会長としてもフロント企業の社長としても、会食の機会は多い。どんな相手であっても仕事だからと渋々付き合うのだが、楽しいものではない。

それに引き換え、あすかとの時間は嫌な気分になることもなく、楽しいものだ。

彼女は長門の素性を知らないから、へつらうことも媚を売るようなこともない。ただ純粋に食事を楽しめる。そんな彼女を、長門は絶対に手放したくない。

とはいえ、まだ出会って一週間ほどでそう伝えるのは、時期尚早だろう。そこで長門は、改めてあすかに念押しする。

「会食が面倒なのは本当だが、食事に誘うのはあすかに会いたいからだ。覚えとけよ」
顎に手を添えて、あすかを落とすつもりで微笑みかける。

「で？ あすかも俺に会いたいだろ」

重ねるように問いかけられ、あすかは流される。

「あたしもリュージさんに会いたいよ。……うん、会いたいんだと思う。だって会いたくなかったらこんな風に食事に誘ってもらっても、ついていけないしね。リュージさんに誘われるのは、全然嫌じゃないもん。ってことは、やっぱり会いたいんだよね」

まるで自分に確認するような返事だ。あすかからは、まだ自信を持って断言できない迷いが滲み出ている。

だがそうだとすると、これは喜ぶべき進歩だろう。

あすかは自分の気持ちに向き合う、最初の一步を踏み出したに違いない。

「それでいい」

その答えに満足して、長門は口角を上げたのだった。

大学の講義室の一室。終業のチャイムが鳴り、解散になったと同時に、あすかは声をあげた。「やっと終わったあ」

約二週間あった定期試験も、今受け終わったもので最後。明日から待ちに待った長期休暇だ。解放感でくたりと机に頬を乗せると、冷たい感触が気持ちいい。

「あっちゃーん、今日の打ち上げ、行くでしょ？」

同じ試験を受けていた友人がバッグを片手に話しかけてきた。あっちゃんとは、あすかの愛称だ。「行く行くー」

「じゃあ行くこ」

定期試験のあとは、友人たちと集まって打ち上げを開くのがお決まりである。女だけが楽しい。もちろん今回も参加するつもりだった。

あすかはリュックに荷物を入れると肩にかけて、友人と並んで教室を出る。

「打ち上げてどこに集合？」

「一階にあるカフェテリア。うわあ、暑……」

すでに七月も終わり、八月に入った。じりじりと照りつける太陽の日差しに、二人は目を細めた。

そして友人は思い出したように言う。

「そういえばもう準備した？ 水着とか」

「ん、なんのこと？」

あすかが首を傾げると、友人は呆れた顔をする。

「明後日、海に行くじゃん！ まさか忘れたわけじゃないよね」

すっかり忘れていたあすかは、「あ」と呟いた。

そういえば、夏の休暇中に海へ行く旅行の計画があった気がする。

「あっちゃん〜？」

ずい顔を近づけられて、あすかは乾いた笑みを浮かべた。

「ははは……。ごめん、最近いろいろあつてさあ……」

「もう……。明後日なんてすぐだよ。準備は大丈夫なの？」

「準備はすぐできる……と思う」

「いい加減だなー。でも楽しみだよ。わたし、今年こそ彼氏を作るって決めてるんだっ」

「彼氏、ねえ……」

「だって夏だよ！ 海だよ！ ただでさえ女子大で出会いがないんだから、こういう機会をフルに使わなきゃ、出会いなんてそうそうないって！」

友人は力強く拳を握った。今回の旅行は、あすかを含めた女四人、友人の彼氏とその友達三人、合計八人というメンバーだ。いわゆる合コンの延長線。友人カップル以外は今現在決まった相手が

いないフリーなので、出会いのきっかけにはなるだろう。

この旅行のことは、試験が始まる前まではあすかもすっかりと覚えていた。だが、ひとりの男との出会いですっかり頭から抜け落ちていたのだ。

「リユージさんに連絡しないとなあ……」

「なんか言った？」

「ううん、別に」

あすかが首を横に振ると、友人は「変なの」と笑った。

* * *

立派な外観のビルの一室——六州会の会長室で、長門は電話に向かって凄みの利いた声を響かせた。

「ああ？ なにを言ってるやがる。金を集められねえのはおまえの責任だろうが。期日は守れ。今週末までに、きっちり耳を揃えるんだな」

それだけ言うと強引に通話を切る。

「ちつ、愚痴を言う暇があったら、足りねえ頭を使えばいいものを」

そう吐き捨てた直後、部屋の扉が開いて声が聞こえてきた。

「ずいぶん機嫌が悪いようですねえ」

「……佐賀里か」

部屋に入ってきたのは、部下で六州会の幹部を務める佐賀里だ。

「お疲れさまです。期日を守っていただけなさそうですねですか？」

「ああ。だが構わねえよ。使えない人間は切るだけだ」

「ええ、承知しています。そういうあなただからこそ、私はついていくのです」

長門は顔をしかめて「ふん」と鼻を鳴らした。

彼は仕事中、厳しい顔つきでいることが多い。自分についてこれない無能な人間をすぐに切り捨てるのは当然。もしなければ組織は成り立っていかない。甘えなど必要ないのだ。

しかし、長門は物事を楽しむタイプでもある。特に気に入っているものに関しては、冷酷に切り捨てたりはしない。あすかの前では表情をころころ変え、親しみやすい雰囲気を出すのも、そのためだ。

長門はおもむろにスマホを開いた。そして、先ほどまでとはまったく違う声で呟く。

「あー、あすかが足りねえ」

「……また古籍さんの話ですか」

佐賀里は大げさなため息をつく。最近、長門が暇さえあれば彼女の話をするからかもしれない。

「ずいぶん執着なさっていますね。正直、あなたのことですから、すぐに飽きるのではないかと踏んでいました」

「あいつ、面白いぞ。話をしてても、目の前に好物の料理が出されたら、そっちに夢中になっちゃう

う。人の話なんか聞きやしねえ。俺の前で平然と——しかも美味そうに飯を食う人間なんて、今までいなかっただけからな。それだけでも面白くて仕方がない」

あすかの様子を思い出し、長門は口角を上げる。

「それはずいぶん興味深い方ですね」

今まで呆れていただけの佐賀里も、口元を緩ませた。

「だろ？」

「会長があいつたタイプの女性を気に入るとは、想像もしていませんでしたよ。ですが、古籍さんと会うようになってからは、女遊びはぼったりでしょう？ よい傾向だと受け止めています。それまではずいぶん不名誉な噂を流されていたので」

「そんなに酷くはなかっただろ」

「自覚がなかったのですか」

佐賀里にそう驚かれ、長門は反論を躊躇する。

確かに、これまでは好みの女を好き放題食ってきた。それらはいつも一晩限りの関係だったから、いい噂が流れていないのは当然である。

しかしあすかと出会ってから、長門は女遊びをやめたのだ。佐賀里が感心するのも無理はない。

「……あいつと会ってからは健全な生活をしてるだろ」

「偉そうにおっしゃることでないと思いますよ」

佐賀里の正論に、長門は口を閉じた。けれどここで言い負けるのは悔しい。

「……おまえはどうなんだ。おまえこそ楽しんでるだろうが」

「人聞きの悪いことを。私はあなたのように来るもの拒まずで相手を口説いたりはしません。あなたと違いますから。それに、夜を共にするのは同せ——」

「いい、わかった。それ以上言うな」

長門は慌てて佐賀里の言葉を遮った。

「てつきり『こちら側』に興味があるのかと。会長になら詳しくお話しさせていただきますよ」

「ねえよ。あるわけねえだろ」

「残念ですねえ」

「……おまえと話すのは疲れる」

どうにも言い負けた気がしてならない。しかし、佐賀里という男は美しい容貌とは裏腹に辛辣で、普通の男なら耳を塞ぎたくなるようなことを平気で口にするのだ。

これ以上付き合えば、こつちが疲れるだけだと判断し、長門は口を噤んだ。その代わり、楽しいことを口にする。

「あすかに会いに行くか」

「会長。それは仕事を終わらせてからにしてください。まず、この報告書に目を通していただきます」

「……わかった」

長門は内心舌打ちしながら、今日も必ず入るだろうあすかからの連絡を楽しみにしていた。

自分でもおかしなものだと思う。十五も年下の女からの連絡を楽しみにしているだなんて。だが、長門の言いつけどおりあすかが自分に連絡してくれると思うだけで、「面倒な仕事も片づけられる。そんな自分に一番驚いているのは長門自身だ。」

しかし、長門の機嫌を急降下させる出来事がすぐに起こったのである。

* * *

試験の打ち上げのあと、あすかはいつもより早い時間に長門に電話をかけた。

「もしもしリユージさん？」

『あすかか。試験はどうだった』

「うー……訊かないで〜」

痛いところを突かれたあすかは、情けない声をあげる。電話越しに長門はかすかに笑った。

「笑いごとじゃないよー」

『笑ってないだろ』

「嘘つき！ 笑ってるの、電話越しでもわかるよっ」

あすかがむっつとして言い返すと、長門は今度は声を出して笑う。

「リユージさーん……」

『ああ、悪い悪い。つい面白くてな』

「面白くないよっ。こつちにとつては大問題なんだから。ああ、単位取れなかったらどうしよう」

頭を抱えるあすか。すると長門は、苦笑の混じった声で言った。

『からかって悪かった。機嫌直せよ、あすか。そうだな、今度服でも買ってやる』

「服ー？ いいよ、そんなの悪いし」

『遠慮するなよ』

「いやいや、遠慮するよ」

いきなり服を買ってやると言われ、そう簡単に『ありがとう』と返す人間がどれだけのいるだろうか。あすかにも一応、遠慮というものはあるのだ。

「なんでいきなりそんなことを言うの？」

『前から思ってたことだ。食事もいいが、あすかに好きな格好をさせてやりたいってな』

「好きな格好？ してるよ、これでも」

『それは好きな格好じゃなくて、楽な格好だろ』

「はっきり言うなあ。まあそのとおりだけだ」

あすかはかわいさより、金銭的に負担の少ないお買い得で楽な格好を好んでいた。それは経済的な理由と、自転車通学にはラフな格好が適しているからだ。

「そりゃあ、おしやれしたいって思うことはあるけど……。実際おしやれを優先している余裕なんてないから、いいんだよ」

『だから買ってやるって言ってるだろ。遠慮するな。俺が買ってやりたいんだから、あすかは自分

の欲しいもんや我慢してたもんを素直に欲しいって言えばよ

「リ्यूジさん……」

『俺に甘えろよ、あすか』

彼がどうしてここまで自分を甘やかそうとするのか、あすかにはわからない。

それはさておき、やはり長門の申し出には素直に領けない。しかし、真剣な彼をはっきり拒絶することもできなかつた。

だからあすかは苦し紛れに、話を後回しにすることにする。

「……その話はまた今度、今度ねっ」

『おい』

「それより今日は話があるの！」

『話？』

なんとか話題を切り替えることに成功した。というよりも、もともと本題はこちらだ。

「今週末は一緒に食事に行けないんだ」

『なにかあるのか』

長門の声が若干低くなった気がする。しかし気のせいだろうとあすかは続けた。

「友達に海へ行こうって誘われててさー。思い出したの、ついさっきなんだよね」

『海だど？』

「そうそう。大学の友達とか、その子の彼氏とか何人かで、海へ遊びに行くんだよ」

『男と一緒なのか』

「ん？ そうだよ。男の子四人、女の子四人の計八人。車二台でね」

『俺よりガキをとるだと……？』

楽しそうに話すあすかの声を、長門が遮る。しかしその声はくぐもっていて、よく聞こえない。

「え？ なに、聞こえなかつた……」

『……いつだ』

「へ？」

『それはいつの話だ』

そのとき、あすかは長門の声がいつもより低いとはっきり感じた。しかしその変化の理由はわからず、首を傾げながら答える。

「えっと、明後日だよ。朝の七時に迎えに来てくれる予定で——」

『そうか。わかつた』

彼はそう言うと、電話を切った。

「あ、ちよ、リ्यूジさんっ？」

唐突に切れた通話に啞然としつつ、あすかはスマホを見つめる。

「なんか変だったなリ्यूジさん……どうしたんだろ」

考えても答えは見つからない。ただわかつたのは、彼の機嫌がずいぶん悪そうだったことくらいだ。

「もしかして食事に行けないって断ったのがまずかったのかな……。うーん……。あ、やばい。早く旅行の準備をしなくちゃいけないんだっ」

あすかはあまり物事を気にしない性格だ。長門の機嫌が悪くなった原因を考えるのを諦め、海へ行くための準備を再開したのだった。

それから二日後の朝。あすかがアパートの前で待っていたら、そばに見慣れないシルバーの車が停まった。その助手席から友人のひとり、花江はなえが顔を出す。

「あすかちゃん。こっちこっち」

「おはよう。晴れてよかったね」

リュックを肩にかけたあすかが近寄ると、花江はそのまま指で運転席を示す。そこには花江の彼氏がハンドルを握っていて、お互いに簡単な自己紹介を済ませた。

「じゃあそろそろ行こうか。もうひとり迎えに行くからさ。あすかちゃんは後ろに乗ってくれる？」

「わかった」

花江の言葉に頷いて、あすかが後部座席のドアに手をかけたそのとき――

「あすか！」

突然名前を呼ばれ、びくりと肩を震わせる。振り返ると、いつの間まに停まっていたのか、黒の高級外車の後部座席から見覚えのありすぎる人物が降りてきた。

「あれ、リュージさん!？」

どうしてここにいるのだろう。それもこんな朝早くに。

大股で近づいてきた長門は、あつという間まにあすかの目の前にやってきた。

「どうしたの？」

びっくりするあすかに構わず、長門は無言のまま腕を掴んでくる。

「え、わ、わ、な、なにに!?! なにっ!？」

「来い」

「リュ、リュージさん!？」

驚いて抵抗しようとするが、大人の男性の力に敵かたうはずもない。力任せに引つ張られ、ずるずると引きずられるかたちで花江たちの車から引き離される。

「ちよ、なん……」

「黙れ」

「……っ」

なにがなんだかわからない。とりあえず腕を離してもらいたいのにな、それを口に出せなかった。

長門は力強くあすかの腕を掴み、こちらをいっさい振り向かずにごんごん進む。彼の背中からは、今まで感じたことのない雰囲気きふくが放たれている。あすかの背筋に冷たいものが走った。

怖い。今まで長門のことを怖いと感じたことなどないのに、異様な恐怖感こふくがあすかの身体を包んだ。

抵抗できずに、あすかは長門が乗ってきた高級外車の後部座席に押し込まれる。

しかしそれをそのまま見過ごせないのは、目の前であすかを攫さらわれた花江だ。

「……あ……あすかちゃん！」

それまで呆ぼろけていた彼女は、はっと我に返り、助手席から呼び止めようとした。しかし、長門と目が合つて一瞬で青ざめる。そして花江は口を噤つぶみ、黒い外車を見送ったのだった。

ほとんど力づくで車に乗せられたあすかは、いつもなら文句のひとつも口にしていただろう。けれど、この状況下で文句を言う勇氣はさすがに持ち合わせていなかった。

ただとにかく花江にスマホで謝罪の連絡を入れ、『自分は大丈夫だから心配しないで。海には自分以外のメンバーで行つて欲しい』と頼んだ。

それを終えると、静かというよりも息苦しいくらい重い空気の車内で、自分の腕を掴んだまま離さない男を見上げる。

長門はあすかよりずいぶん年上で、社長という社会的にも地位のある男だ。しかし、それを鼻にかけた言動をされたことも、傍若無人ぼろじやくぶじんに振る舞われたこともない。彼はあくまで正当な手段——多少強引であろうとも、相手を納得させてから行動に移す人物だと、あすかは認識していた。だからこそ信用していたし、すんなりと『友人関係』になりえたのだ。

けれど今はどうだ。彼はあすかの意思など確認せず行動し、すべてをねじ伏せてしまうほどの強い威圧感と口も挟めない緊張感を放っている。

こんなやり方は長門らしくない。こんな姿は知らない。

そう思うのに、あすかは緊張で言葉が紡紡げない。いや、長門の雰囲気ふんいきがそれを許さないのだ。

車内の時間は喉のどが渴かわくほど長く感じられ、車が停まった頃にはぐったりと疲れ果てていた。

先に降りた長門に引つ張られて、あすかは外に出る。そして見上げた建物にぽかんと口を開けた。それは以前訪れた長門の会社のあるビルとは別の建物で、一見普通のビルである。しかし入り口から姿を見せた男たちは、普通のサラリーマンとは到底思えない雰囲気を持つ人種だったのだ。

「お疲れさまです！」

一斉に飛んできた野太い声に、あすかはびしりと固まる。けれど長門は気にも留とめず、あすかを見せつけるように引きずりながら、頭を下げる男たちの間を進んだ。

時折、訝あやしむような視線があすかの背中に突き刺さった。とにかくこの場から逃げ出したくなつたが、それを見越したように長門が強く腕を引いたせいで、逃亡は叶わなかった。

ここがどこかとか、あの人たちはいったいなんなのかとか、どうして自分を連れてきたのかとか、訊ききたいことは山ほどある。しかしどうしても口に出せない。

あすかは背中にじつとりと汗を掻きながら、おとなしく長門についてエレベーターに乗った。

エレベーターを降りた長門が、とある部屋を開けた途端、中にいた数人の男たちが立ち上がる。

屈強な体格の男性たちが、野太い声をあげた。

「お疲れさまですっ」

「ああ」

「会長、おはようございます。今日は……おや、珍しい。お客様とご一緒でしたか」

その中に見知った顔があり、あすかは目を丸くした。それは一見すれば女性と見まがうほどの容貌の男、佐賀里である。

「……さ、がり、さ……」

やっと声が出せたのは、知っている顔を見た安心感からだろう。

「……佐賀里さんだ」

安心したら、へにやりと身体の力が抜けた。それが伝わったのか、長門があすかの腰に手を回し支えてくれる。けれど、もはや悲鳴すら出てこない。

「古籍さん。いらっしやい」

「あれ、でも佐賀里さんがどうしてここに……？ それに『会長』って……」

(誰のこと?)

そう考えながら、自然と長門を見上げていた。すると長門が視線を落とす。いつものからかいが混じった瞳ではなく、どこか真剣さをうかがわせて、じつとあすかを見下ろしている。

「リ्यूジさん、社長さんじゃないの……？」

ぱつりと尋ねると、佐賀里が呆れたように言う。

「会長。古籍さんには、まだお話しになっていらっしやらなかつたんですか」

「ああ。もう少し経つてからと考えてた。その方が面白いだろう？ びっくりさせるのもいいが、今はまだ怖がらせるだけだと思つてな。けど状況が変わつた」

「——そうですか」

たったそれだけで意思の疎通を終えた二人とは反対に、あすかは取り残されている。二人の会話の内容が、どうものみ込めない。

「あの、なんの話……？ それに、ここどこ……」

きよるきよると見渡す。先ほどまでいた他の男たちは下がらせたのか、いなくなつていた。ここにはあすかと長門、そして佐賀里の三人の姿しかない。

先ほどまでいた男たち——屈強な体格をした強面の男たちや、素人目でも明らかに一般人とは思えないほど癖のある男たちの姿が、あすかの脳内に浮かび上がる。

(……気のせい、かな。……あの人たちつて、もしかして、ヤ……いや、そんなわけない)

頭の片隅に浮かんだとある単語を消そうと、あすかはふるふる頭を振つた。

勘違いだ。そうに違いない。

そう何度も自分に言い聞かせるが、その単語をどうしても口にしようになつて口元を覆う。どうしよう、このままじゃ危うくぼろつとこぼしてしまふそうだ。

あすかは縛るように長門を見つめ、はっと息をのんだ。

長門から、先ほどの男性たちと同じ雰囲気……いやそれ以上に近寄りたいたいものを感じる。それは一度近寄つたら到底無傷では済まないだろう、圧倒的な存在感と獐犷なまでの威圧感だ。

あすかは動揺のあまり、口から手を離してしまった。

「ね、ねえ、リ्यूジさん。なんかこつてまるで……」

『『ヤクザの事務所みたい』?』

あすかの考えを読み取ったのか、寸分たがわぬ台詞にどきりとする。声が出た方を見ると、声の主である佐賀里が軽く目を伏せ、謝罪した。

「申し訳ありません。そう顔に書いていらっしやるようにお見受けしましたので、つい口に出してしまいました」

「あ……そ、です……か」

なんだか恥ずかしくなった。頬をつねる仕草で逃げようと俯いたが、降ってきた声で引き留められる。

「そのとおりですよ」

思わず顔を上げると、佐賀里が美しく微笑んでいた。あすかの喉がひくりと上下する。

「ここはヤクザの事務所です」

断言され、あすかはばちばちと何度も瞬きを繰り返した。

「ヤ、ヤクザって……あの、ヤクザ……？」

「ヤクザにどんな種類があるかと思っっているのか興味がありますが、とりあえず古籍さんの思い描いているヤクザで間違いないと思いますよ」

あつさりと肯定される。

あすかは頭を抱えた。近寄りが見たい雰囲気を持つ男たちとこの建物から予想していたものの、まさか本当にそうだとはい到底信じられなかった。いや、信じたくない。

しかし佐賀里が肯定したのだから、確かにここがヤクザの事務所で、ここにいた男たちはもちろん

んヤクザなのだろう。

（でも、おかしいよね？ どうしてここに『社長』のリュージさんや、『社長秘書』の佐賀里さんまでいるんだろう……）

「……リュージさんは、なんでここにいるの……？」

あすかの問いかけに、長門は少し肩をすくめて答えた。

「もちろん、俺がヤクザだからだ」

それはまたも信じられない言葉だった。

あすかはばちくりと目を丸くする。言われていることがわからず、きよろきよろと視線を動かす。そして再び長門を見た。

「……誰が？」

「俺が」

「……リュージさんが？ 嘘だあ」

「嘘なんか言うか。それともなんだ。俺はヤクザには見えねえって言いたいのか」

「見えないとかそういうんじゃないか……え？ いつから？」

あまりの驚きに、あすかの頭は上手く働かない。

「最初からだ。あすかに会う、ずっと前から」

「じゃ、社長さんっていうのは嘘なの……？」

「嘘じゃねえ。あれは俺が経営しているフロント企業だから、表向きは社長という肩書きが正